趣旨説明：帝国と魔女で読み解くヨーロッパ

小 野 賢 一

この研究報告書は、2017 年 11 月 25 日に愛知大学人文社会学研究所主催で開催された講演会「帝国と魔女で読み解くヨーロッパ」の研究報告の成果物である。

本講演会は、2016 年 11 月 26 日に愛知大学人文社会学研究所主催で開催された「国境を超える歴史学」（報告者：村上司樹氏、服部良久氏、多田哲氏）の問題意識を継承しつつ、前近代ヨーロッパの「帝国」と「魔女」というキーワードを通じて、近代歴史学のナショナル・ヒストリーを乗り越え、21 世紀にふさわしい新しい歴史学のあり方について議論するものである。

中世にイギリスと呼ばれる国はなく、アンジュー・プランタジネット家の領地は、大別すると、イングランド王国とノルマンディー公国から成るアングロ・ノルマン王国、封建領主の城が今も多数残るロワール渓谷に位置するアンジュー伯領、西南フランスに広がるアキテーヌ公国という政治的枠組みで構成されていた。それぞれ法制度も異なっていた。それゆえ、このような政治的枠組みを、イングランド国制史という一国史観の枠を超えて、「アンジュー帝国」という概念で捉え返す研究が近年進められている。

そこで本ワークショップでは、現在のイギリスと呼ばれる地域とかなりの部分が重なる中世のイングランド王国を舞台に、議会形成に大きな役割を果たしたことで知られるシモン・ド・モンフォールの歴史的位置づけについて、アンジュー帝国史研究及びシモン・ド・モンフォール研究の第一人者の関西大学の朝治啓三氏に、従来のイングランド一国史的な視点とは異なるアンジュー帝国史研究の最新の成果を取り入れたグローバルな視点からご教示いただく。

同様に、中世ヨーロッパには、ドイツという政治的枠組みはなく、かなりの部分が現在

のドイツと重なる神聖ローマ帝国という政治的枠組みが成立していた。そして、この政治的枠組みは、さらに多くの領邦という政治的枠組みを含んでいた。ヨーロッパのなかでも特に魔女狩りが頻発したのは、神聖ローマ帝国であった。神聖ローマ帝国の魔女裁判について、この分野の気鋭の研究者である大阪市立大学の田島篤史氏に登壇していただき、魔女狩りの手引書『魔女への鉄槌』の著者として悪名高い異端審問官ヘンリクス・インスティトーリスによる魔女裁判の事例を取り上げ、中世から近世の移行期の魔女狩りが本格化する直前の状況を、豊富な史料を駆使した最新の実証研究の成果に基づき、ご教示いただくこととしたい。

近年『中世ヴェネツィアの家族と権力』（京都大学学術出版会）を公刊された神戸大学の高田京比子氏にコメンテーターとして参加していただき、「〈海洋帝国〉としてのヴェネツィア」と「カモニカ渓谷の魔女迫害」という海と山にかかわる具体的な事例を通じて、さらに広い視点から考える機会を提供していただく。

3 名の先生方が提示された具体的な事例に共通するのは、全くの偶然ではあるが、前近代の「帝国」のなかの議会政治の展開や魔女裁判への冷静な判断による批判といったポジティヴな側面である。かつては暗黒の時代と考えられることもあった前近代（特に中世）を広い視点から捉え返すこのような実証研究の蓄積と総合によって、我々は歴史から 21 世紀を生きるための手がかりを得ることができるのではないだろうか。本ワークショップは、21 世紀の世界史（Transnational History）を実践する試みである。